

創造的自己表現としてのダンスの出発 — 奈良女子高等師範学校附属小学校において —

安村 清美

Dance Education at an early stage to cultivate a creative human expression

YASUMURA Kiyomi

This study focuses on a brilliant performance made by Emeritus-prof. Chiyo Matumoto, who was a pioneer leader to initiate dance education at Nara University Laboratory School in Japan, giving it to primary school children for 6 years after the end of World War II.

My research is intended to make clear some features at an original stage of dance education developing a creative human self-expression, through the analysis of her studies paying close attention to what children really were.

Keywords:

Dance Education Matsumoto Chiyo

NARA University's laboratory for primary school children

Movement expression Children

ダンス教育 松本千代栄 奈良女子高等師範学校附属小学校
身体表現 子ども

1. はじめに

戦後、我が国の舞踊教育に関しては、昭和22年の学校体育指導要綱に小学校では、類別遊戯中の『ダンス』として、中学校、高等学校においては類別体操、スポーツと並んで『ダンス』として取扱われた時をもって、その内容と方法に革新的な転換をもたらした。すなわち、その内容に“表現技術—生活環境や生活感情から取材して創作的表現に導く、作品創作—表現技術によって作品を構成する、作品鑑賞—鑑賞力を養い創作にも役立てる”と謳い、児童・生徒の創造性と、活動の過程の教育力に視点を置いたものへの転換であることは、これを戦前の舞

踊的教科内容に比較してみるとその転換はいつそう明らかになる。

大正2年、初の学校体操教授要目では、『行進遊戯』『動作遊戯』として、大正15年改正教授要目では『唱歌遊戯』『行進遊戯』として、歌詞内容を表現的にあるいは、ステップを主にした隊形変換を楽しむ指導者主導の内容が選択され、昭和11年学校体操教授要目まで継続された。昭和17年の改正では、教育界も社会情勢の影響を受け、体錬科体操『音楽遊戯』と名称変更が為され、運動量の多寡が問題にされた。

本研究では、上述の昭和22年学校体育指導要綱

の作成委員として中心的役割を果たし、当時、奈良女子高等師範学校附属小学校(以下、附属小)の教官として、子供たちと共にダンス学習に命脈を掘り起こしていた松本千代栄に焦点を当て論を進める。

松本個人に関する論文としては、“Chiyoe Matsumoto — Mother of Dance Education in Japan”¹「松本千代栄研究—舞踊発想と音楽」²があり、前者では、アメリカの草創期と比較しながら、我が国における舞踊教育に松本がもたらした、制度上の確立と研究・教育的業績について論考され、後者では、舞踊教育のために松本が数多く創案した音楽の解説の分析的接近によって、表現内容が発達に即し、作品の構造、また運動、イメージ双方とも多方向性と持つこと、特に、教育実践と研究が相互に影響を与えつつ生かされた創案であることが明らかにされている。

松本の附属小時代を明らかにすることは、以降50余年にわたって、創造的芸術経験を舞踊教育の本質とみなし、学校教育における舞踊教育を先導し続けた、松本および舞踊教育の萌芽期として重要な意味をもつと考えることができる。このような観点から、「学習研究」³誌上に発表された松本の論考を中心に、子供たちの実態を視座の中心に据えた、創造的自己表現としてのダンス実践と理論構築の創始期の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 奈良女子高等師範学校附属小学校の教育

附属小は、大正15年、木下竹次が主事として着任以来、昭和15年に退官するまで、「合科学習」すなわち総合学習を掲げ、教育実践を通して、新教育の中心となった一校であった。木下の主眼としたものは、子供の『興味、関心を指導の原理として子供に臨み』『低次元の創作から高次元の創作へと進むべきもので、低い創作の芽を大切に育てることから創造性を養わなければ』⁴であり、教授から学習へ、他律から自立への方向性をもつ児童中心主義の学習法の提唱と実践でもあった。

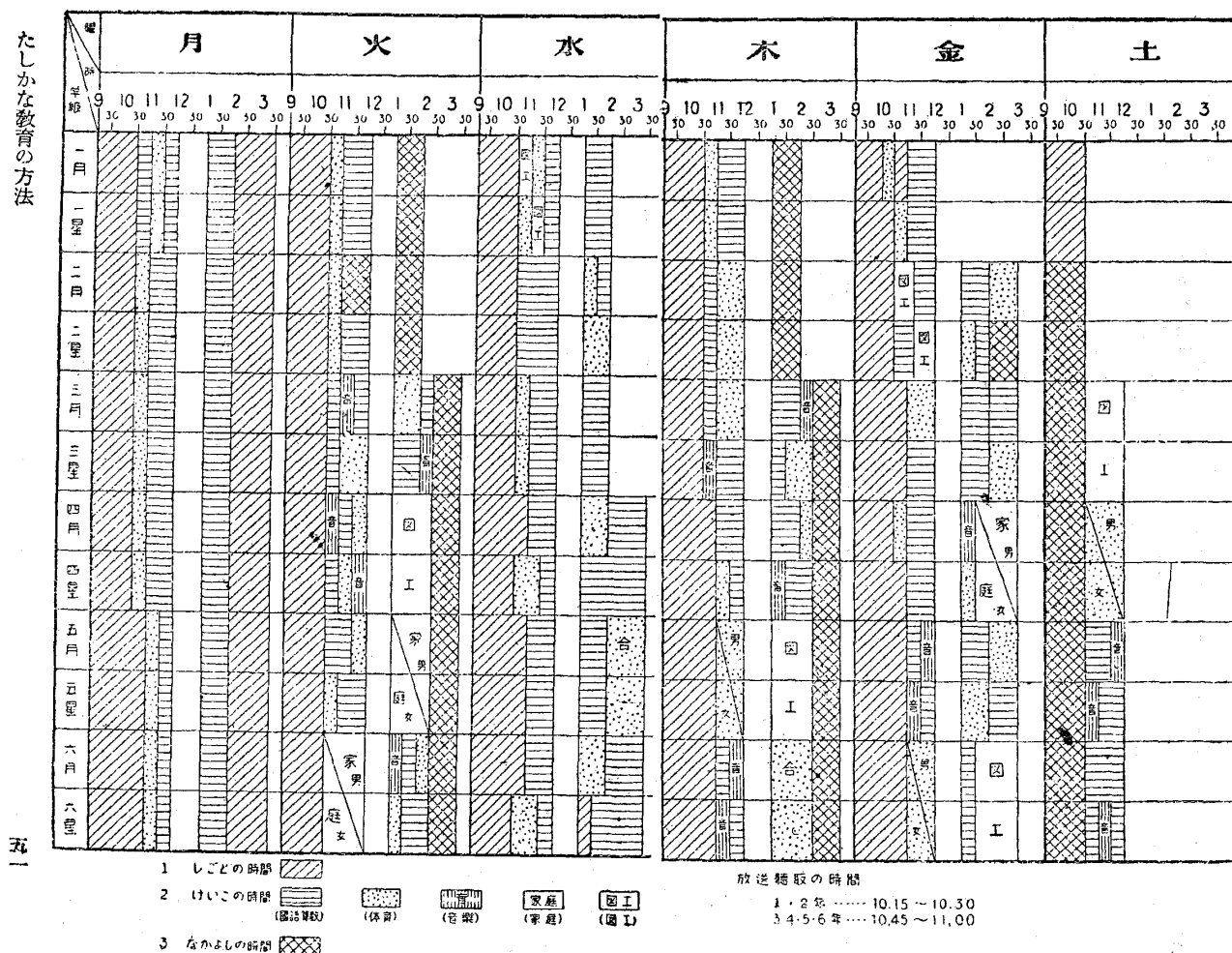
昭和16年からの国民学校時代(武田一郎主事)をはさみ、昭和22年12月、武田鷹泰主事が着任、この間、大正11年4月創刊以来(昭和16年3月～昭和21年6月は休刊)、学習誌として実績のある「学習

研究」も復刊されている。重松の下、教官全員(同人と呼称)で組織された奈良プラン研究会で、昭和23年からカリキュラム検討が始まり、その後、現在まで続く附属小教育の根幹をなす「奈良プラン」(「しごと」「けいこ」「なかよし」と称する形態・構造と各種能力指導系統表を備え持つ)が、主事、教官の協議、検討を重ね、作成、実施された。「奈良プラン」導入の経過については、『新しい学校建設の歩み』『カリキュラムの設定』として、「学習研究」⁵誌上にも公表され、また、「たしかな教育の方法」⁶として著作にもまとめられている。そこでは、『ほんとうに自分たちになっとくのか教育を実現し…、そのような教育を行うためには、私たち教師が、今までの経験を材料にし、自分たちの考えによって、はっきりとした教育の計画を立てなければ…』⁷と決意を述べ、それぞれの独自性とねらい—「しごと」は、子供の自主性、生命の発動力を高め、子供たちの欲求する「真剣な共同生活」に全身全霊を挙げて打ち込み、「けいこ」は、はっきりとした客観的な基準に照合して、ある特定の能力を、自分一個のねらいにまで高めようとして、心身を集中して努力する。「なかよし」は、子供たちが自分たちの社会生活、学校生活を自分たちの手によって、自分たちの望むようなものにすることをねらった活動。—を保持しつつ、互いに補完関係をもつものであることが述べられている。

資料1)の生活時程表⁸に見られるような学校での活動は、“あすを待つ子ども、通学の道、校門の中の青い風、自由な朝のひととき、朝の清掃、「しごと」のベルがなる、たのしい実地踏査、「けいこ」の時間、お昼のサイレン、「なかよし」の活動、能力別「けいこ」の時間、「なかよし」の半どん、下校のサイレンが鳴る”⁹のタイトルのもと、子どもたちの姿が生生きと描かれており、自主創造の伝統を生かした学習計画・実践であり、かつ、当時の我が国教育界に先見性を提出したものであったことは、『学校の研究をしておいたことが、およそ半年ほど後に、教育界の問題になってくるようにみえ、わたくしは漸く現場の尖頭を走っているという自信を得た。』『「たしかな教育の方法」は、万余の刊行をみて…』¹⁰という、重松主事の回想からも推察できる。

資料1

生活時程表



「たしかな教育の方法」p.p.50-51より

3. 奈良女子高等師範学校附属小学校におけるダンスの位置

上述のような環境のもと、松本は昭和16年4月～18年3月、¹¹戦後再び昭和21年4月～27年3月、附属小でダンス教育の実践と研究を重ねていく。また、一方では指導要綱作成委員として教育界全体への普及にも努める。(表1参照)¹²この間、「学習研究」誌上には、『舞踊教育にあつたて』(昭和22年)『身体をとらえつつ身体をのりこえていくもの』(昭和24年)『一人の生活をみつめつつ—創作ダンスの指導』(昭和26年)など、19編を残している。『子供をはなれては、何も信じるものはない』『こどもたちの歩みの断片を眺めふりかえって、燃えさかる火炎のような生命の高まりを何とかとらえたい』¹³の言に代表される子ども観に基づく実践は、

以下に論ずる「けいこ」として週1時間、「なかよし」として3年生以上の選択によって組織されたグループで実践が展開されたが、これは、試行錯誤とそこに立ち顕れる光明の連続でもあった。

「けいこ」としてのダンスは、当時の主事、重松が『私たちの学校のカリキュラムの特色の一つに、全学年の男女凡てにダンスを学ばせていることを挙げることができる。』¹⁴と述べているように、奈良プランの中で独立した位置を占めていた。これは、『私たち同人としては、ダンスは一応体育の中に入れていながらも、実質上は、体操と音楽の中間のものとし、ほぼ独立の位置を与えているのが実情である。』とし、「けいこ」のために作成された『各種能力指導系統表』に、言語能力、算数能力、音楽的能力などと並列に11種の中にいられているこ

表1) 松本千代栄執筆論考と関連事項 (昭和16～27)

履歴	論考(雑誌記事)	奈良女高師附属小関連事項
s. 16. 3 東京女高師体育科卒業 4 奈良女高師附属小教諭 s. 18. 4 東京女高師研究科入学 9 東京女高師教諭 s. 21. 4 奈良女高師附属小教諭 s. 22. 学校体育指導要綱作成委員	G『学習研究』 S『新体育』 T『体育の科学』 22 「舞踊教育にあたって」G 23. 3 「舞踊教育一ヶ年をふりかえって」G 23. 10 「日記断片」G 24. 2 「ダンスの指導記録」G 24. 5 「身体をとらえつつ 身体をのりこえていくもの」G 24. 7 「問題の子ども」G 24. 10 「火花の子たち—ダンス能力の指導」G 24. 12 「ただひとつの生命のために —なかよし演出グループダンス」G 25. 5 「心の素顔」G 25. 10 「続・身体をとらえつつ 身体をのりこえていくもの」G 25. 12 「小学校一・二年の体育指導」S 26. 1 「小学校一・二年の体育指導」S 26. 4 「小学校一・二年の体育指導」S 26. 5 「小学校一・二年の体育指導」S 26. 6 「小学校一・二年の体育指導」S 26. 6 「一人の生活をみつめつつ —創作ダンスの指導—」T 26. 8 「表現の命脈—ダンスの実践を通して—」G 26. 12 「一つの作品をとおして観る子供の傾向」G 27. 3 「芸術性の伸展と児童期」G	15. 12 木下竹次主事退官 16. 1 武田一郎主事着任 16. 4 「学習研究」誌休刊 21. 7 「学習研究」誌復刊 21. 11 「わが校の教育」 22. 7 武田一郎主事転任 22. 12 重松鷹泰主事着任 23. 奈良プラン研究会、奈良プラン樹立へ 24. 5 「たしかな教育の方法」 “しごと、けいこ、なかよし” 24. 6 「生活カリキュラム構成の方法」 25. 10 「正しいしつけ」 26. 12 奈良女子大学文学部附属として存続が決定 27. 3 奈良女子大学文学部附属小学校へ

資料2

各種能力指導系統表	
一	言語能力指導の系統
二	社会科的能力指導の系統
三	算数的能力指導の系統
四	自然科学的能力指導の系統
五	音楽的能力指導の系統
六	図画的能力指導の系統
七	工作的能力指導の系統
八	家庭科的能力指導の系統
九	身体的能力指導の系統
一〇	衛生的能力指導の系統
一一	ダンス能力指導の系統

「たしかな教育の方法」 p.p.179-278

と¹⁵、また、職員一覧に“ダンス”担当として掲載されていること¹⁶も、この傍証といえよう。さらに、重松は、ダンスを尊重するのは、『実施してみ、具合がよいのでずっとそうして』おり、『いたい、私たちの学ばせているダンスとは何であるか。端的に言えば、松本さんの指導しているダンスである。』¹⁷と象徴的な解答を出している。ダンスは、つまり、表現活動、芸術的活動であり、子どもたちの内面と身体に関わる美の発見、真実の発見へと導くものであると結論付ける。自身の身体によって『自己の感動の根底をきわめる』ことであったからこそ、他の活動では得ることができない内容をもつものとして、主事や、他の教官にも独立の位置を容認されたものと考えることができる。

「なかよし」としてのダンスは、3年生以上の学級を解体したグループ活動であり、文芸、研究、制作と並んで演出グループの一つとして存在した“ダンスグループ”として展開された。松本は、この指導教官として『子供たち個々の個性をとらえ、二五(筆註：二五は、25人の意)個性の結集に、どういう形をとって流れださせることが、最も性格をいかす在り方であろうか』¹⁸と述べ、より子ども一人一人を生かすべくダンスへの取り組みが為されていたと考えられる。

4. ダンス教育の実践—「けいこ」「なかよし」として

①発達の見通し 昭和16年、教官となって初めて出会った子供たちは、前述のように、合科教育による自主創造の空気の中で育ち、松本は「音楽運動」として、教材を教えるだけのダンスに疑問をもつ。子どもを生かすダンス本来の教育的価値の探求のため、戦時下、母校研究科に入学するが、所期の目的は果たすべくもなく終戦を迎える。昭和21年から昭和27年に東京教育大学に赴任するまでの附属小での6年間は、実践を通して発達特性について見通しを持つ期間であった。

表2)にあるように、松本は、何度か発達別、学年別のダンス学習の指標を提出している。これらは、「けいこ」としての指導実践—1学年から6学年までを週1時間—に基づいた見通しであり、特に、“各種能力指導系統表”においては、ダンス指導の目標¹⁹として

- ① リズミカルにうごく身体能力を得させる
- ② 知的、感覚的な観賞能力を得させる
- ③ 個性的、創造的な表現能力を得させる
- ④ とけこみ、うちこみ、たのしむ生活態度を得させる

を掲げ、身体能力、表現能力、観賞能力、生活態度として、各学年に配当している。

これらの資料より、身体、表現、観賞という舞踊経験の全体性に着目しつつ、『よい動きを見つけようと工夫する』『動きの中に感情をとらえ』などに代表されるような、子供自身が発見・創造していく過程への言及、および『表現を協同して』『群の中に調和し』など子供たち相互の交流と影響、換言すればグループ活動への取り組みが示唆されていることも特徴の一つであるといえる。

また、『この時期にこそ、しっかりと真実にくいいて、なりきってできる雰囲気をも身につけさせなければ』(1～3年)²⁰『創作的な指導といわれると、どの学年も学年相応に作品を完成していく過程が一般には予想されがちである。その完成というものを、成人のように作品の完成ととらえた時は、子どもは生かされない。』(全学年)²¹と述べ、舞踊の価値を、これ以前の作品を踊ることで充足される、つまり、運動を伴う美的感情の追体験のみではなく、発達に即した舞踊のもつ創造的価値の

表2)

ダンス内容の発達別比較

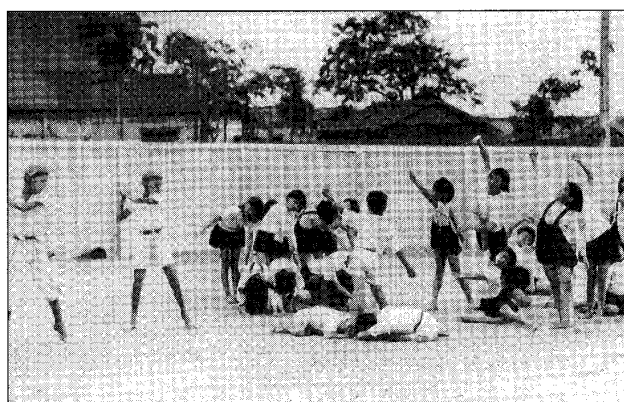
対象	学校体育指導要綱(文部省昭和22年度)	各種能力指導系統表(奈良女高師附属小学習研究会 昭和24年)	学習研究(昭和25年、26年)	
			『この時期に、音楽という紐帯に支えられて衝動を生かし、彼らに安定と自信をあたえ、感動をもりあげていくものこそダンスである』(42号)	
第1学年	ダンス 表現遊び 生活環境から取材して表現させる(例)まりつき・鬼ごっこ・たこあげ ちようちよう・小馬 (民謡その他適当なものを参考作品として用いてもよい)	身体 音の長短、強弱、速度的変化を中核にして… 全身を活動的に… 表現 生活環境から具体的な動きをもつものを選んで物語的な遊びができる 体験、空想 観賞 友達との動きに関心をもち 身体 音の長短、強弱、高低、速度的変化及び結合を中核にして… 先生との動きを直観的にとらえる遊びができる 表現 生活環境から具体的な動きをもつものを選んで模倣ができる 模倣の身振りに、いろいろな工夫を凝らすことができる 観賞 動きの要素を直観的にとらえて、すぐ自分の身体にうつす… 身体 体験に訴えてよい動きを見つけてやるような、動きの創意工夫が… 表現 体験を生かし…実感を観察して、素朴であるが本当の動きを…協力して工夫することができる 二人—三人 観賞 よい表現、動きを直観できる 人の動きを丹そよみとすることができる 身体 身体支配の自由性が拡大し、美しい動きの基礎ができる …よい動きを見つけてようと、工夫することができる 表現 即興的に表現できる。題材を数多く豊かにとらえることが…協同して表現を工夫することができる 二人—三人 楽曲、歌曲についてややまとまりのある表現をすることができる 観賞 気持ちを集中して観ることができる 身体 表現意欲に適応する身体の動きができる 身体 身体の支配だけでなく、場の支配も考えられる 表現 動きの中に、感情をとらえ、表すことができる 即興的、重点的に表すことができる 楽曲、歌曲に助成されて作品的なまとまりある表現ができる 観賞 ひろい角度に観賞眼がはたらく(動き、表し方、態度等)	『この時期に、音楽という紐帯に支えられて衝動を生かし、彼らに安定と自信をあたえ、感動をもりあげていくものこそダンスである』(42号) 『模倣と物語である。…ほんとうのようしようにしようとする態度は、…未文化の時代にのみ方向づけられ得る。』(51号)	
第2学年			『衝動を契機として自己実現という精神状態に…。リズムは多様を統一に持ち来り、統一をくずして多様を支える精神活動。これが筋肉感覚に訴えるものと結びあうとき、その感情的価値は大きい。』(42号) 『模倣の充実と題材を自分で見つけることである。』(51号)	
第3学年			『かつて、ささやかな自己実現の場であったダンスは、ともすれば陥りやすい焦燥から彼らを救い且は、原始的ながゆえに最も自然に子供達を協同の域に推進していく』(42号) 『題材のひろがりである。…1,2年を通じて進めてきた模倣や、物語の直観的態度が…飛躍的に表現としての生命を充実し…』(51号)	
第4学年	ダンス 表現 1、自然運動によって基礎的身体をつくる 2、生活環境や生活感情から取材して創作的表現に導く (例)(イ)生活環境—はねつき・ぶらんこ・泳ぎ・麦かり (ロ)生活感情—喜び・希望 (民謡その他適当なものを参考作品として用いてもよい)		『…幼い時代の終尾を飾るかのうちに、彼らは素朴にして生命の充実度の高い作品を…』『全心を凝集してあたる受容、発動こそ、子供たちをより新しい世界の発見へと誘導していく。』(42号) 『表現として自覚の生まれる時期である。…今までの没入時代から自覚に時代へ移る過渡期…、必然的にグループとしての活動が…』(51号)	
第5学年			『子供たちが生活のあらゆる面に、ひととき能動的に活動を開始しようとするこの期に、…その活動により深い真理の目覚めを与え、より広い美の発見をもたらし源泉として、舞踊の創作的活動は注目に価する』 『子供たちが生活のあらゆる面に、ひととき能動的に活動を開始しよう』 『すずんでよく協同し、作品としてのまとまりがたしかになる。』(51号)	
第6学年			『子供たちが身をもってする作品は、彼等自身の内に潜む理想の結果であり、彼等が身をもってする美的自我の実現こそ、真理に驚嘆し美に憧憬する至純の性格を築く所以である。』(42号) 『多くの抵抗をもつ。…この不安定の複雑な自己が互にひきあいおしあって緊張している時期に、それを純粋無難な一筋に統一していく機会を与えるものはダンスである。』(51号)	

体験的蓄積が、自他への気づきを伴って子どもの成長に教育的意味をもたらすものとみていることがわかる。『ものと交渉し他者と交渉し、みずからと交渉するような身体活動の軌跡が学びという行為』²²と規定し、教育と身体について、活動するその過程こそ学びであるという現在の命題は、この期の松本の創造的表現活動のなかに、すでに解決の端緒をみることができるのではないだろうか。

②一人一人を生かす、拓く 「なかよし」の活動における具体的な指導の記録から、空間や身体の動きに関して考察する。「なかよし」は前述のように、今日でいう、クラブ活動的なものであったため、より一人一人を生かす、あるいは拓くという指導が為されていたことが読み取れる。



奈良女高師附属小：「秋風」 T.O君



奈良女高師附属小：グループ表現

例えば、踊りの上でも身体はあまり利くほうでなく、どうすればよいかが焦燥の種であったことにも対し、『腕よりも身体で動いて下さい。身体が

動くとき、空間がゆれます。空間がゆれるとき波動がどこまでもつたわります。身体で空間を揺り動かし、新しい空間を描いていく、それが舞踊です。』²³『動きにも量感がなければいけないと思います。奥行ですね。…立体的に』²⁴とまず、全身で表現することと空間意識の関連を説き、『動きをおこしたら大切にして、その動きを満足するまでのばして…もっと野放図に手放してごらん。』²⁵『動きは流れです。ブランクの時が入りこまないように呼吸をつないでください。』²⁶と、一つの動きを、内的生命をもつ舞踊運動化するべく指導が為されていたことがうかがえる。これらは、身体を限界まで動かすことの重要性、つまり、単なる運動を、それとは異なる舞踊運動化すること、あるいは、動きの連続—動きの流れ—への、この時期からの早い着目として、注目すべき発言であり、現在にも生きるダンス指導の要点であると考えられる。

これらは、『現実の子供の姿からかくあれと祈る子供の姿を描き、芸術の本質に照らして、ダンスを教育としていかにとらえるかに悩み、その安定をもとめ』²⁷た時期を超え、実践を重ねる中から導き出された教育に還元されるべき舞踊理念として、松本の教育・研究上のその後に継続されるものでもある。

5. 創造的自己表現としてのダンスの出発

ここまで論じてきたように、附属小での実践は、同時にダンス教育の価値—理念の構築の始まりでもあり、過程でもあるといえる。

つまり、前述のように、舞踊の全体性—身体・表現・観賞の関係性と循環—を発達レベルに合致させた内容で経験することを、子どもの活動内容として持っていたことは、後年“踊り—創り—みる”となって、今日まで一貫するとみることができる。また、指導における動きの流れや、空間意識への言及は、舞踊美の特質としてその構造を感覚的に把握していたと考えられ、その後、分析・実験的研究によって、舞踊構造へ接近することへの素地となったと考えられる。

『ものに対して新鮮な感動をもち…美しいものと自らの内的性格との一致がたやすい』²⁸子ども、

『その題材の中に踊りこんだ子供たちの生のやむにやまれぬ発現としての動き』は、『知と情の分離もなく、意と体の分離もない。そのまま多様の統一である。』²⁹という信念、あるいは、子ども観は、感動に自己を投入し、身体的創造活動として自己を表現するダンスの価値を子どもの中に明確に見出しているからこそ、言い得たものであろう。『創作、それは子どもを信頼することの上にのみ成立する』仕事であり、『現実の子供を直観して、そこに悩み、そこに方途を見出す以外、真実のものは生まれない』³⁰という松本の言は、ダンスを超えて、教育の原点をここに見ることができよう。

さらに、当時、松本がおかれた教育環境を見渡したとき、戦後という時代、合科教育から奈良プランへと続く附属小の歴史、その中で育った自主創造の空気を持つ子どもと出会い、教材を教えるだけのダンスに疑問をもったこと、また、例えば『体育といえば、松本千代栄先生の体育(ダンス)というのは、目を見張るものがありましたね。』³¹という発言に見られるように、当時の錚々たる教官を感化していく実践力を備えていたことや、主事の重松の論に代表されるように校内でのよき理解者に恵まれたことも、松本のダンス教育者としての個性と相俟って、創造的自己表現としてのダンスが開花すべき時と場、そして人であったことが理解できる。

本研究にあたり、お茶の水女子大学名誉教授、松本千代栄先生ご本人より、貴重な資料をご提供いただき、また、インタビューにも応じていただきました。心より感謝申し上げます。

[註および引用文献]

- 1 Sondra FRALEIGH “Chiyoe Matsumoto — Mother of Dance Education in Japan” 1996. 10 DANCE TEACHER NOW
- 2 安村他『松本千代栄研究—舞踊発想と音楽』平成12年11月、「舞踊学」舞踊学会
- 3 「学習研究」は、奈良女高師附属小から大正11年4月に創刊され、戦前、戦後を通して学習法研究のための教育実践を現在まで掲載し

続けている。

- 4 木下、小原編 「木下竹次」昭和47年 p.44 玉川大学出版部
- 5 「学習研究」28号
- 6 奈良女子高等師範学校附属小学校「たしかな教育の方法」昭和24年5月 秀英出版
- 7 同上 p.1
- 8 同上 p.p.50-51
- 9 同上 p.p.37-52
- 10 「わが校八十年の歩み」p.62 平成3年4月 奈良女子大学附属小学校創立80周年記念事業実行委員会
- 11 表1の通り、昭和18年4月から21年3月までは、舞踊教育の更なる勉学を志し、東京女高師研究科にもどっている。この事情については、「学習研究」第30号に本人が記している。
- 12 講習会に関して 年月日については、資料収集ができていないが、本人へのインタビューによれば、夏休みは、一日も無いほど日本中の各県で講習会を行った。
- 13 松本千代栄『火花の子たち』昭和24年10月、「学習研究」第30号
- 14 重松鷹泰『ダンスの価値』昭和25年10月、「学習研究」第42号
- 15 資料2参照、「たしかな教育の方法」昭和24年5月、奈良女高師附属小学学習研究会編
- 16 註5 p.13
- 17 註14
- 18 松本『一つの作品をとおして観る子供の傾向』昭和26年12月、「学習研究」第55号
- 19 同上6 p.p.270-278
- 20 松本『表現の命脈』昭和26年8月、「学習研究」第51号
- 21 同上
- 22 佐藤学、栗原彬他編「越境する知1身体：よみがえる」p.288 2000年7月、東京大学出版会
- 23 松本『問題のこども』昭和24年7月、「学習研究」第27号
- 23 同上
- 24 同上
- 25 同上

- 27 松本『舞踊教育にあつたて』昭和22年、「学習研究」第7号
- 28 松本『芸術性の伸展と児童期』昭和27年3月「学習研究」第58号
- 29 同上
- 30 松本『一人の生活をみつめつつ』昭和26年6月「体育の科学」体育の科学社
- 31 同上10 座談会『私と奈良の教育』（奈良プラン当時の在職者による）

要旨

本研究は、奈良女子高等師範学校附属小学校において、戦後まもなく教官として、子供たちと共に6年間、ダンス学習に命脈を掘り起こしていた松本千代栄に焦点を当て論を進める。

附属小時代、発表された本人の論考を中心に、子供たちの実態から離れることない、創造的自己表現としてのダンスの創始期の特徴を明らかにする。

附属小は、大正以来、自主創造の伝統をもち、ダンスは、松本着任以来、「けいこ」として全員に、「なかよし」として選択で学習された。実践を通して、身体・表現・鑑賞の柱を軸に発達の見通しを掲げ、この期に、グループ活動による創作過程がもたらす教育的価値に言及している事は、特筆に値する。さらに、舞踊美の特質である動きの流れ、空間性に関する指導も認められた。

(2001.10.31 受稿)